

— やまもといちろう氏による、本書解説 —

■ 解説のようなもの

これは「湯川本」ですから。

湯川鶴章という男が、長年培ってきた技術というスコープを通して、人間を見ている本です。総論で言えば、どういう技術が次に来るかは前菜であります。本論は技術が社会に与える影響、あるいは人間が森羅万象に挑む際に技術がどのように活用されるのか、ということ湯川さんの視線を取りまとめた、湯川一流の書き口です。

それは、未来における技術を論じていたはずが、道中で伏線として”社畜”について思うことを語る湯川さんであり、進化生物学のダンバー数をベースに SNS を語る湯川さんであり、Techwave の事業が難航し現実に悩む湯川さんであります。技術への取材を通して未来を追い求め、そこに自分を置いて夢を見ている、等身大の 54 歳の姿であります。

この電子書籍を通読して、湯川さんに質問したいことはたくさんあります。確かに直感でモノを判断する世界が到来するかもしれないし、そういう社会が到来すると未来を予測したとして、それを読者はどうすれば良いのでしょうか。そして、この本の物凄く太いテーマに「技術が発展していくがゆえの人間回帰」というとても美しい世界を垣間見ます。私も、これは素晴らしいことだと思ってる。その一方で、私たちの社会はどうしようもなく下らない、でもやらなければならない作業はたくさんあり、クリエイティブな人たちの何百倍もの雇用を生み出し、そこで所得を得て家族を養っているわけです。きっとこうな

るであろうという美しい世界観と、それを全否定してあまりある悲惨な現状との間で、知識ある大人はどうバランスを取れば良いのか、という問題意識を読後感に持つことになります。

確かに、頭脳労働に支えられた知識社会が到来し、モノから情報へ、機能から価値へ、大量生産は死に絶えて多品種少量で、ネットは一般常識のような広いものよりもクラスタ分けされた細かな市場に分断して、いまでは未来予測まで統計的にできるようになりました。その中で、むしろ必要とされるのは人間の感性であり、直感であるというテーゼを提示した湯川さんの立論のユニークさは評価されるものでありましょう。

一方で、だからなんだという気持ちになるわけです。行く先はないのに手にしてしまった地図のような、湯川ワールドへ迷い込むことになります。これがまた、面白い。前書きに「目に見えない世界が存在するという信念と、自分と宇宙が1つにつながっているという考え方」とあるんですけど、そもそも世界がすべて目に見えるところにあるのだというのは知性の傲慢というべきものだし、自己と宇宙の関係は言うまでもなく「自分は宇宙の構成要素に過ぎない」故に常にひとつに繋がっているのです。しかし、目的はなくとも宇宙を理解する手がかりは湯川流に提示してあるんですよ。

だから、敢えて湯川さんが一番最初の問題提起にテクノロジーにおける Next Big Thing のありなしを論ずるのはとても正しいと思うし、そしてそれは単一方向の進化なのではなく、扇状に広がる、より拡散的な技術の進歩なのでありましょう。細分化され、エントロピーは増大していくのは自明のことでもあります。統合のプロセスはどうなっていくの

かは大変興味があるところですが、この湯川本ではそういう文脈もどんどんと併呑して論述が進んでいきます。

一連の具体的な議論はおおよそ第四章でピークに達し、BLOGOS や Klab や LINE といった具体的なサービスも視界に入れちょいちょい摘みながら本書のテーマは具体から概念へと一気に収斂していきます。んで、これらはすべて直感です。ええ、湯川さんが感じている、これがきっと正解なのだろうという直感の連鎖へと進んでいきます。特にこれと違って根拠なし。でもそれがいい。いろいろなところから知識を取り出してきて構成されている、まさに湯川ワールドの具現化、文章化と言えましょう。

もちろん「なんでそこでこの例示が出てくるのか。反証できることも多々あるし、この段階で湯川ワールドを構成するピースにしてしまっても大丈夫なのか」という懸念も持ちつつ読み進むわけですが、二度読みしてようやく「ああ。湯川さんはきつこういうことを言いたかったのだ」と分かる部分が随所にあります。左脳が司る理屈ではなく、ワクワクを呼び覚ます右脳の直感をもたらす存在への認識であり、それが大なる宇宙へ到る繋がりへと導く鍵だということでもあります。

したがって、本書をまず一度読んだ人は湯川ワールドに対する理解をどう深め、ある意味で湯川さんの世界観にどこまで自身の知性を委ねて二度読みするか、咀嚼していくのかという判断を迫られることとなります。ある意味で、湯川さんの書き口は知的にハイランダーであり、ある程度の智を備えている人に対して書かれた啓蒙書とも言えます。

まえがきとあとがきのテンションの差であったり、ワクワクと精神世界、そしてやりがいへと変遷していく湯川さんの思索の軌跡自体がコンテンツなのでありましょう。だからこそ、湯川ワールドがかくも豊かで、奇想天外だけど一種のぬくもりを感じさせる文章になるのだというのは良く分かります。ワクワクと現実の間で揺れる 54 歳の姿という意味でも、凄くすーっと読める内容であったのは意外でした。

そう、これは「湯川本」ですから。



やまもといちろう

ブロガー・投資家・イレギュラズアンドパートナーズ代表取締役。

著書に「ネットビジネスの終わり (Voice select)」、「情報革命バブルの崩壊 (文春新書)」など多数。

やまもといちろうブログ

<http://kirik.tea-nifty.com/>